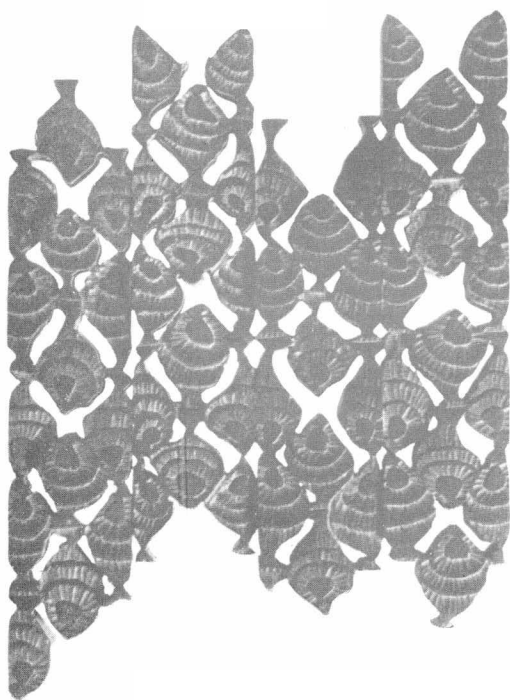


シリーズ・現代家庭教育新書 48 明治図書

文学のなかの母と子

西郷竹彦著

文学のなかの母と子



西郷竹彦著

明治図書

〈著者紹介〉

西郷竹彦（さいこうたけひこ）

一九二〇年鹿児島県生まれ。東京大学卒。文芸学者。文芸理論

研究会代表。鹿児島短期大学教授。

主な編著書「教師のための文芸学入門」「文学教育入門」「シリーズ・文学と教育」（全四巻）「シリーズ・民話と教育」（全三巻）「文学のなかの教師像」「絵本の与え方」「お話と絵本の相談室」（以上明治図書）「虚構としての文学」（国土社）などのほか、児童文学の分野でも活躍。

現住所 千葉市花園町一六一八一六

文学のなかの母と子

シリーズ・現代家庭教育新書 48

著者／西郷竹彦 発行者／藤原政雄

©一九七一年

発行所／明治図書出版株式会社

東京都中央区入船三―三―一
電話（五五一）八二六六―九
〒一〇四

印刷所／大進印刷株式会社

一九七一年五月初版刊

* 検印省略

まえがき

本書は日本近代百年の歴史のなかから、さまざまな時代、さまざまな作家によって描かれた、さまざまな母子像を紹介しようとしたものです。

本書はしかし、「子どものしつけ方指導書」ではありません。もちろん母親というものの「型見本集」でもありません。

ここにとりあげたどの作品の主人公をみても、母親である読者が明日から子どもの前でどうふるまったらいいかということのお手本にはなっていません。文学というものは、母親のための教育学や心理学の教科書ではないのです。

これらの作品（だけでなく、すべての文学作品）は、人間いかに生きべきかについて教えるものではなく、人生について考えさせるものであり、いや、正しくいえば人生そのものをじかに見せるものなのです。主人公の人生を読者にも間接的に生きさせる（体験させる）ものなのです。そこで読者が、たとえば主人公の母親としての行為に何かを学ぶものがあつたとすれば、それはそれでいいことです。

しかし、文学は何よりも生きるということそのことを眼に見える姿としてさし示し、そこに生

きることの意味、読者に問いかけているものなのです。たとえば母にとって子とは何か、子にとって母という存在の意味するものは何か——これが文学の問いなのです。

ですから、ここに登場する主人公たちの行為を善悪という道徳的判断だけでわりきってみるのではなく、そのようにしか生きられぬ、また、そのように生きている人間の真実として読みとってもらいたいと思います。そして、その生きざまのせつなさ、悲しさ……というものの美しさに心うたれ、人間というものの奥ぶかい何ものにふれていただけたらとねがっています。

このことは子どもたちに文学を与えるというときの私たちの基本的な態度でもあるのです。文学はけっして子どものための（また母親のための）説教の材料ではないのですから。

いくつかの作品の紹介にあたって、三鷹市の文芸学セミナーのお母さんがたの感想の一部を引用させてもらいました。

なお、とりあげた作品は手軽に入手し、読めるということも考慮に入れて、文庫本によりました。できれば、原作にも眼をとおしていただけたらと思います。

文学のなかの母と子・もくじ

まえがき

一 現代に共感をよぶ明治の母親像……………九

*徳富蘆花「思出の記」

亡父の墓所にて……………二

没落士族の誇りの意義……………六

二 坂道に荷車を引く母と娘……………二〇

*山代巴「荷車の歌」

母子巡礼……………二〇

ほら穴の握り飯……………二六

三 きびしい労働にきたえられる母子……………三〇

*徳永直「最初の記憶」

矛盾する母のことば……………三三

金釘坂の夜道で……………三六

四 わが子を捨てて女の愛に生きる母……………四〇

*林芙美子「泣虫小僧」

雌雄のおおろぎ……………四六

粗暴な母親の態度……………五〇

母性愛に生きるか、生活に生きるか……………五

五 赤い糸でむすばれた母と子……………三

* 山本有三「路傍の石」

主人公の意地……………三

赤い糸まき……………六

自分の名まえを失うということ……………四

六 身分差別のなかに苦しむ母子……………六

* 田宮虎彦「異母兄弟」

オモニーお利江と呼びすてにされ……………六

妾の子と呼びすてにされ……………八

母の悲しみ、子の悲しみ……………三

七 母のおもかげを恋い求める少年……………三

* 室生犀星「幼年時代」

生みの母と育ての母……………三

母がわりの異母姉……………六

去っていった母を恋う……………九

八 母を憎み反抗する少年……………一〇五

*坂口安吾「石の思い」

ひねくれた子ども……………一〇六

母への反抗……………一〇九

子どもの悲しみ、切なさ……………一一三

母への愛の自覚……………一二四

九 導きの星となった母の幻影……………一二六

*北杜夫「幽霊」

母の思い出……………一二七

母の最後の姿……………一三〇

母の幻影を求めて……………一三三

十 孤独に耐えて生きる幼ない魂……………一三九

*佐多稲子「子供の眼」

主人公とその一家……………一四二

新しい母の「無関心」……………一四三

諦めの哲学——自己防衛……………一四六

まとめ……………一四二

一 現代に共感をよぶ明治の母親像

——徳富蘆花『思出の記』

「僕」という一人称で書かれたこの自伝風の小説は主人公、菊池慎太郎の一家が破産し、その年の秋、父をうしなうという悲しい十一歳の思出からはじまります。

時はあたかも明治六年、西郷南洲の征韓論せいかんろんが破れ、佐賀、秋月、小倉の乱、熊本神風連じんふうれんの暴挙、相つぐ明治十年の西南役と、世の中とかく物騒となり、九州の片田舎、妻籠つまごめの里へも社会のうたず波がおしよせてきていました。

「僕」の家は造酒家つくりざかやで、妻籠第一の豪家といわれ、店には酒樽だるをならべても、南朝の忠臣のそのまた忠臣の家系で、家の奥には刀剣をかざり、「僕」も六歳の頃までは、木剣を腰にさして正月には紋付の羽織袴はかまで下男をつれて八幡宮におまいりするといったふうでした。「自分でも吾菊池われ慎太郎は士族だと威張いばって居た」のでした。

好人物の父は家産をかたむけ、さいごの賭として望みをかけていた製糸事業にもみごと失敗し、「僕」が十一の春、家屋敷をすっかり人手に渡し、一家は町はずれの一軒家——祖父が物数寄に建てた小さな隠宅に引きうつりました。

主人公の母は名を節とよび、「りりしい、氣象の勝った人」でした。「花見には父に手を引かれて、盗賊の入った夜は母の袂の下にかくれる」といったぐあい。したがって「父は五目も十目も母に置いて居た」というのもうなずけます。見ず知らずの人間の寄合である都会とちがって、田舎のくらしの中で的一家破産はまるでさらし首のようなつらい思いでした。なまじっか知らぬ顔がないだけに、どこを見ても苛責の鬼にかこまれる。昔の榮華の歴史を知っているだけに、みなものむすんだ口もとに嘲弄冷笑のかげがうかぶように思われるのでした。ちよつと歩いて、昔わがものであった家屋敷、山林田畑がいたるところに待伏せして、われをはずかしめる。きのうまでは、となりの家の梅の花を折っても「坊っちゃま、あぶのうございます、私が折ってあげましょう」といわれたのが、今日は「どこの餓鬼だ、人の麦畑歩いてるなあ？」とどなられる。「藻掻いても藻掻いても、最早駄目だ。田舎は深い井戸のようなもの、一度おちたら容易に上れない」

*亡父の墓所にて

母は非常に気象の烈しい人で、家は潰れる、良人は死ぬる、たいていの婦人は落胆沮喪して死ぬるのだが、母はいよいよ運命に反撥して、おのれという一念がたえず眉目の間にひらめいていた。奢ってこそいなかったものの、大家に生れて大家に嫁した身の、緑の黒髪惜げもなくふつつり切て、木綿着物に呉縞の前垂、木綿をひいたり、機を織ったり、夜もおそくまで婢を相手に裁縫物をしたり、精一ぱいに働いていた。

「僕」はあいかわらず小学校に通っていましたが、一家破産、父の死、ということ、心ない友だちにからかわれ見下されるようになって、もう学校には行かぬとだだをこねはじめるのでした。

さすがに母も「僕」の胸中をくんで、今は昔にひきかえて苦しい中から学校用の諸道具に決して不自由させず、はじをかかすまい、卑屈にさせまいと思ったのでしょうか、衣類までも昔にまさるとも劣らぬように木綿着物のこざっぱりしたものを着せて、朝々、手づからきりつと帯をしめてくれて、本を背負わせ、門口まで送って、「僕」の影が学校の門に入るまでは立って見ていたのでした。「余儀なく僕も行く。行くが、学校は最早昔のように染の場所でない、むしろ囚徒

が工場に出る格で行くのである。面白味がない、したがって張りがない、したがってなまける、したがって荒む^{すま}」ついに「僕」は学校の勉強よりも遊びに実が入るようになり、その結果、いままでおぼえのない罰をうける、いよいよやけになるということで、はては其年の冬の試験に生まれてはじめて落第というものを知ったのでした。

「僕」がこの不吉の報をわが家に持ちかえったとき、どのくらい叱られるかと覚悟をきめていたものの、其日は何事もなかった、母は黙然と何か考えに沈んでいました。僕はその沈黙をかえって気味悪く感じていましたが、その夜も別に何事もなくすぎました。あくる日、遊び仲間が門口から「慎ちゃん、遊びに行かねえか」と呼び出しをかけると、母は何思ったか、慎太郎は用があるからとことわらせて、さて、自身も着物を着かえ、「僕」にも紋付の木綿羽織を着せ、「来なさい」といって門口を出しました。

雪もよいの寒空、どこを見ても冬枯の、渋面^{じゅうめん}つくって、今にも泣き出しそうな景色でした。

家を出て二三十歩行くと、金満^{かねもち}家の子の勇次という色の生白いのがいきなり、「二けん、三げん、しけんにまけて、落第坊主」とはやしたてます。「僕」はぶちのめしてやりたいと思うが、母がじっとにらんだので、だまってついて行く。すると、こんどは、やはり遊び仲間の勘次郎という半面真黒な痣^{あざ}をした子が「やあ慎ちゃん、紋付着てどこ行くだ。先生にことわりに行くかね」という。「僕」は顔をまっ赤にして、やはりだまって母の後についていくのでした。

母も無言、「僕」も無言、雪もよいになってきた田の中道を横ぎって、しだいにくぬぎのしげった丘の方に近づいていきます。さては墓参かなと思う。この丘の後に「僕」の家先祖代々の墳墓があるのです。しかしそれにしては、花ももたず、線香ももってこず、どうするのであらうと疑ったが、母はやはり無言でずんずん落葉にうずもれた小道を山へ山へと上って行くのでした。やがて二人は、菊池家の菩提所へやってきました。この墓所での母と子の劇的対話はこの小説の中でもたいへん感銘ぶかい場面の一つです。そのところをつぎに引用することにしましょう。

母は墓地の入口で足駄をぬいで、つと後も見ずに上って行くので、僕も草履をぬいでついて行く。母は父の墓——まだ木標のままだ——の前に来ると、膝を折って石の上に坐った。しばらくは無言である。

「慎太郎」

僕は顔を上げた。母は何時の間にか、黒鞘の懐剣を左手に握っている。

「おまえはいくつになるかい」

僕は頭を垂れた。

「あれほどおつ母さんが平生言つて聞かすのが、おまえの耳には入らんかい。おつ母さんはな、ただ菊池の家を興したいばかりに、難儀苦勞もしています。其心づくしが、いかに子ども

でも、おまえにはわからんかい。お父さんはこんなになっておしまいなさる、家屋敷は人の有になる、義理にも生きていられたものじゃないに、こうして恥しい目を忍んでいるのも、たった一人のおまえを育てて、潰れた家を立て直して、ああ菊池の家がまた興ったと、村の者にもいわれたいばかりじゃないか。それに今度のおまえの状はいつたい何事です。おまえは水呑百姓の子と遊んで、水呑百姓になつて、それで一生腐つてしまふつもりかい。菊池の家を潰した上にまた潰して、それでいいと思うかい。口惜しいとは思わんか。慎太郎、何故黙つとる。

——エ、口惜しい、今日が今日まで身を削つてもおまえを育てよう一廉の人間にしようと思つていたに、——もうあきらめた。おまえを殺して母も死ぬから、そう思いなさい。それとも口惜しいと思うか。思わんか。慎太郎、さあお死に、この短刀でお死に。卑怯者、さあ死ななか

黒塗の鞘をはらつて氷のごとき懐剣をつきつけつけ母は僕に詰寄つた。ああこの時の母の顔、きつと僕をにらんだ眼光、二十何年を経て今眼の前にありありと見える。どこにいても、気が挫ける時、一点不良の念が萌す時、この一雙の眼はたちまちざらりと吾をにらむのである。

僕の額から大粒の汗がほろほろ滴り落ちた。皮膚は水を浴びたように、腹の内は熱鉄を飲んだように、耳は鳴り眼はくるめいて、心臓は早鐘を撞鳴らすように鼓動する。もう母の顔も見えぬ、言も聞えぬ、夢中に懐剣の柄をつかむかと思うと母はもぎとつて懐剣を二間あまり投げ